

100周年通信 第19号

R5 2.3

「生徒代表誓いの言葉」の後は、
代表生徒による**校歌・生徒歌斉唱**と続き、
式典は一気にフィナーレを迎えます。

校歌・生徒歌が体育館に響き渡り、感動の渦に包まれながら100周年記念式典が幕を閉じる。

700人を超える出席者全員が声を出して歌えば容易なことだと思います。

しかし、今回は**30人の生徒による斉唱**です。
1, 2年の生徒会のみなさんをお願いしました。
練習にもしっかりと取り組んでくれました。



残念ながら本番前日の午前中リハーサルで歌声が響き渡らないことがわかりました。

翌日はやり直しのきかない本番が待っています。

どうにかしなければなりません。

しかし、頼みの綱の赤星先生(歌唱指導担当)の姿はありません。午後からいらっしゃることになっていました。

途方に暮れそうになりました。**なんとかしなければなりません。**そこで、協議をしました。

最初の打開策 **歌う生徒の前にマイクを立てる。**

確かに歌声をマイクで拾えば体育館中に聞こえます。

でも、今までの式典ではマイクに頼らない生の歌声にこだわってきました。

去年の卒業式も、一昨年卒業式もマイクの力を借りずに卒業生の代表は堂々と歌いました。

ですから、少なからず抵抗がありました。

そこで、さらなる打開策 **歌う生徒以外は座ったままで。**

当初の計画では、「たとえ歌わなくとも、校歌斉唱ですから生徒は全員立ったままの状態に耳を傾ける」でした。そこで、リハーサルでもそうしました。残念ながら歌声は響きませんでした。届きませんでした。それは、立っている生徒たちが壁になっているからだと考えました。

そこで、歌う生徒以外は座ったままで、もう一度30人に歌ってもらうことにしました。

**なんと言うことでしょう。
先ほどが嘘のように、体育館後方まで歌声がきれいに届いたではありませんか。**

正直ほっとしました。しかし、それも束の間、腑に落ちないことがふつふつとわいてきました。

来賓の方々はともかく、本校生が、自分たちの校歌を座ったまま聴くというのは、ちょっと違うのではないか。

100周年記念式典の場でありながら、歌うこともなく座ったままにいる。

これでは、招待された人＝お客様と同じではないか。
おそらく生徒たちも「自分たちの式典」という実感を持たないまま終わりを迎えてしまうのではないかと考えました。
そこで、校長先生に相談しました。

答えはいたって明快です。

**体育館中に響くように歌えば良いだけのことな
のです。**

ただ、言ふはやすく、行ふはかたし。

午前中のリハーサルが終わったところで生徒会顧問の城戸先生に相談しました。30人は生徒会の生徒だからです。また、公務が終わって帰ってこられた赤星先生にもすぐに相談しました。

気合いスイッチが入ったお二人は、まばゆいばかりでした。

ただ、斉唱担当の30人の生徒はどのような思いでいるのか。気になりました。

「どうにかしなければ」と思っているのか？

はたまた

「どうしようもない」と思っているのか？

明日(式典)への取り組みが始まりました。
この日のスケジュール予定にはなかった取り組みでした。

